

# 川端康成「化粧」の構造分析

小 埜 裕 二\*

(平成二十一年九月二十九日受付)  
(平成二十一年十一月六日受理)

## 要 旨

物語がどのように組織されているかを、その体系性をふまえて明らかにする構造分析は、文学テクストの読解にとって、どのような意味をもつか。本研究では、構造を明らかにする方法と、その成果をふまえて解釈へ向かう方法の有用性を考え、クロード・ブレモンとロラン・バルトの方法をもとに、川端康成の小説「化粧」の構造を分析した。

## KEY WORDS

構造 structure analysis      クロード・ブレモン Claude Bremond      ロラン・バルト Roland Barthes

## 一、構造分析と解釈

物語がどのように組織されているかを、その体系性をふまえて明らかにしようとする構造分析は、文学テクストの解釈にとって、どのような意味をもつか(構造を明らかにすることと、その成果をもとに解釈活動へ向かうことを本稿では区別して考える)。文学テクストの「構造」を語りの文法をふまえて解きあかしていく研究は、われわれが文学作品の「構成」について考えることとは異なる。比喩的にいえば、「構成」は平面的な理解であるし、「構造」は立体的な理解である。物語言説の配置のありようを解きあかす「構成」の検討は、規則や体系性をふまえて行われるものではない。目の前のテクストを、物語内容を斟酌しつつ切り分けていくおなじみの作業である。本稿で検討してみたいのは、構造分析それ自体の有用性と、構造分析を活かしてテクスト解釈を行うさいの有効性である。構造分析の有用性・有効性を、川端康成の掌篇小説「化粧」(「文芸春秋」昭和七年四月)により検討してみたい<sup>1)</sup>。

その前に、表現形式に注目することが、文学研究にとっていかなる意味をも

つかを考えるために、まず「構成」をモデルに、その有用性を考えてみたい。われわれの一般的な経験から言って、文学作品の「構成」を考えることは解釈の助けとなる。学校教育においても物語教材を扱うさい、導入段階で物語の構成を整理することが多い。物語の筋立てがどうなっているかについてあらかじめ知見を得ておくことは、文学の解釈に資するところが大きい。「構成」の理解は、解釈を助け、主題を導く手がかりを与えてくれる。一方、学習者である読み手が授業を通じて十分な内容理解をしたあとで、その内容を「構成」面からもう一度注目してみることも有効である。その場合、読み手は、理解した内容に沿うかたちでいったん「構成」をたどりなおすが、「構成」に注目する過程で、あらためて読みの発見にいたることが多い。

「構成」理解が解釈に寄与するように、「構造」の考えをもとに解釈に有効な知見を与えることができるのではなからうか。詩学はそれ自身読み手にかわって解釈をしてくれないが、詩学的な知見を豊かに持つことが、間接的

に文学解釈を豊かにしてくれるように、「構成」から「構造」へとテキスト読解の観点を変えることは、読み手の知見を深め、新たな解釈へ導いてくれることが期待される。文学テキストの解釈にとって必要なことは、意味を説明する詩学の成果を、解釈を導きだすためのヒントとなるよう応用することだろう。表現と内容に、とりわけ強い関連性をもつ文学テキストにあつては、構造分析もナラトロジー<sup>2)</sup>も記号論も、対象となる表現の静態を観察し、記述することが目的となるだけでなく、そこから新たな読みを導き出すことが重要となってくる。

ところで語りの文法を考え、体系化をはかる営みは、文学研究の領域では今ではあまり流行らない。それには幾つか理由がある。文学研究がまだ解釈活動に重きをおいていることや、テキスト言語学の研究成果が文学研究者にとって利用しにくいものであること、「文学の科学」が読者の反応を考慮する解釈傾向やポスト構造主義以後の解釈傾向と馴染まないことが理由であろう。歴史が証明するように、作品の物語構造を正確に記述する試み（物語の文法の体系化）には限界がある。「文学の科学」を夢見た時代は構造主義の隆盛とともに終わり、構造がどう脱構築されていくかに関心が移っていった。

しかしそれにも関わらず、物語が展開する仕組みを知っておくことは解釈行為にとって必要である。アメリカで文学理論の入門書として評価の高いロバート・スコルズの『スコルズの文学講義』<sup>4)</sup>では、文学作品の構造分析を進める意義を次のように説明している。

構造主義者が語りの基本構造を抽出しようと試みたのは、ひとつには、語りの基本構造を他の、（たとえば、論理や文法の）基本構造と関連づけるためである。（中略）二番目の答えは、はるかに説得力のあるものである。もしも語りの普遍的要素が何であるかを知り、そしてその要素に対する用語が統一できれば、文学理解の基礎である比較や区別を現在より一層明確に、説得力をもって、体系的に実行することが可能となるだろう。

構造分析が、文学の説明するための枠組みとして機能することを、すなわち構造分析の結果から、ある作家・作品の物語の構造上の特徴をとりだすことや、それをもとにその作家の作品群やある作家の作品群とを比較・分類することにおいて有用性をもつことをスコルズは右の文章で述べている。

本稿の二節・三節では、構造分析の実践について、クロード・ブレモンと罗兰・バルトの方法を紹介し、それをもとに川端康成の「化粧」の構造分析を

行う。ブレモンは物語のサイクルを「三つ組」のサイクルとして体系的に捉えた。バルトは「物語の構造分析序説」（後掲）においてシーケンス分析の方法をわれわれに示した。

ところで罗兰・バルトは、シーケンス分析を定式化し、その成果を登場人物の行為や物語行為と関連づけた後、「天使との格闘」（後掲）と題する講演において、構造分析を利用したテキスト分析に向かう。彼が構造主義者であり、ポスト構造主義者であるゆえんであるが、バルトは体系化の精度をあげる方向だけでなく、構造分析の観点を柔軟に利用して解釈活動（テキスト分析）へ向かっていく。「構造」をもとに解釈へ向かう一つの手がかりは、罗兰・バルトのこの試みが参照できる。本稿の四節では、バルトの「天使との格闘」における方法のつとより、構造分析を解釈に活かす方法について考える。

## 二、クロード・ブレモンの構造分析

『スコルズの文学講義』においては、必ずしも高い評価を与えられていないが、クロード・ブレモンの物語のサイクルとしての「三つ組」の考え方に筆者は注目している。ブレモン「物語り可能なものの論理」によると、物語の構造は、「目的」と「目的に達するための行動」と「その結果」の要素で構成される。これをブレモンは「三つ組」と呼んだ。何かをしたいと思った意図とそれを実現するための行動、そしてその結果の関係について図示したものが図1である。たとえば三島由紀夫の『金閣寺』で、主人公が実際行動をしようとしたときに、心象の金閣があらわれ主人公の行動を阻害するといった場面は、潜在性から現実化へ向かう過程で、「目的達成されず」の方向をたどる例といえる。

図1. 語られる世界を支配する法則（クロード・ブレモン「物語り可能なものの論理」『物語りのメッセージ』1975年10月 審美社）

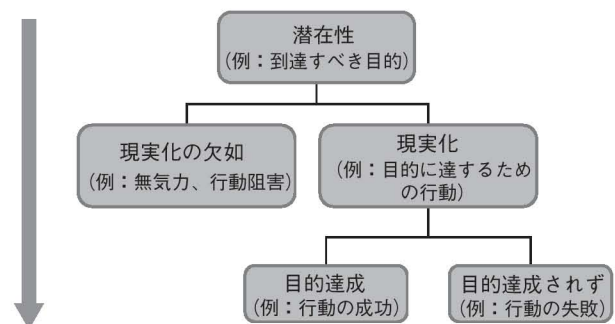
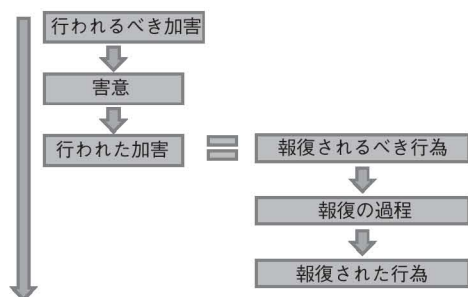




図3. 基本的連続における「端と端」の連繋 (クロード・ブレモン「物語り可能なものの論理」『物語りのメッセージ』1975年10月 審美社)

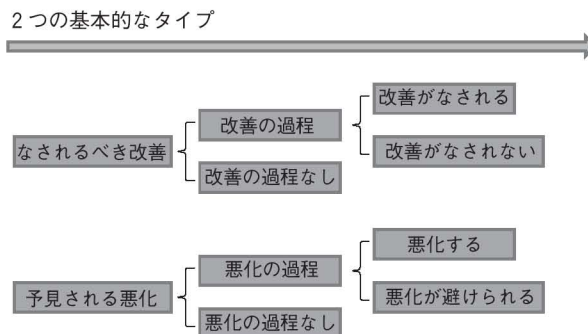


この法則をブレモンは別の角度から次のように整理している。物語の流れは、おなじ目的、行動、結果であつても、事態の改善の方向にむかつて進むものと、悪化の方向に向かつて進むものの二つしかないという(図2)。改善に向けて行われる目的は、そのための行動があり、改善がなされる場合もあるし、改善がなされない場合もある。悪化の過程においては、悪化を避けようとするための行動が示されるが、それによって悪化が避けられる場合もあれば、悪化する場合もある。

ブレモンは物語のそうしたサイクルにおいては、ある人物に加害をくわえようとしてその目的が実行され、結果として害が与えられたときは、それに引き続いて危害をくわえられた当事者が、今度は逆に報復をなそうとする行動目的を設定し、その行動と結果が導かれるという。そうした連接の関係を「端と端」の連繋とブレモンは呼んでいる(図3)。

サイクルの法則として、ブレモンはある行為の過程において、それが別の過程をふくむ場合、その細部をさらに三つに分けて捉えるほうがよいと言う。それをブレモンは「囲い込み」と呼んでいる(図4)。この考えは、後述するバルトが言う、シークエンスの下

図2. 物語のサイクル (クロード・ブレモン「物語り可能なものの論理」『物語りのメッセージ』1975年10月 審美社)



部構造としてのマイクロシークエンスにあたるものである。ブレモンは、たとえば改善の目的が行動に移された場合、それが改善の結果を生む場合と、改善が失敗におわる場合とではどういう構造上の問題が考えられるかについても言及している。すなわち改善あるいは悪化の過程で、それと反対の過程が挿入されると、それらが通常の極に達するのがさまたげられる。反対に、改善あるいは悪化の過程で、その過程に助力する過程が挿入されると、通常の極に達する結果を生むという。助力者があらわれれば改善が成功する場合が多いし、敵対者が現れれば改善がなされない場合が多いということである(図5)。

ところで、スコルズは、ブレモンの「三つ組」の考え方について次のような批判を加えている。

連鎖の最小単位は三つ組であり、そこでは、まず可能性が実現され、実現化された帰結としての結果がでる。展開の各段階で、選択が実行される。第二段階では実現か非実現か、第三段階では成功か失敗か。しかし、三つ組形式の語りの最小単位を追究していくと、問題点は次々にでてくる。

- ・ 国王は健康だった。
- ・ 国王は病気にかかった。
- ・ 国王は死んだ。

ここには潜在的可能性、実行、結果がある。しかしこれをさらに分けることもできる。

図5. 物語のサイクル

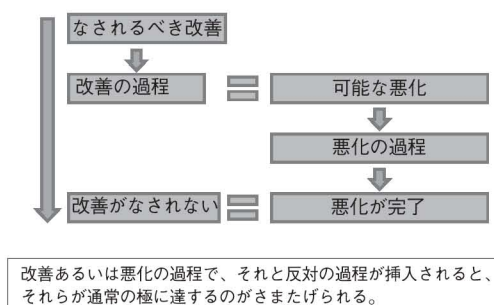


図4. 基本的連続における「囲い込み」 (クロード・ブレモン「物語り可能なものの論理」『物語りのメッセージ』1975年10月 審美社)

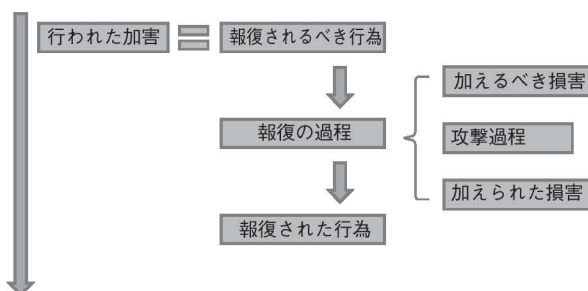
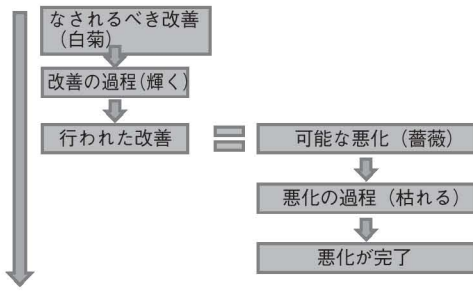


図6. 「化粧」のサイクル（花の場面）－「端と端」の連繫



「若い女」の場面はどのように捉えられるか。枯れていく花の様子をつぶさに見た「私」は、そうした生のサイクルを止めようと化粧する。「若い女」を「魔女」と捉える。生から死へいたる植物のサイクルに対して、「私」が「つぶさに見なければならぬのであった」という言い方をしている以上、「紅薔薇」や「桔梗」の枯れゆくさまを好ましいものと思っていない気持ちを読み取れる。したがって「私」は悪化の過程から改善の過程に向かうことを期待する気持ちにあると思われるが、そのとき登場する「若い女」は

・ 国王は健康だった。  
・ 国王は病気になる危険にさらされた。  
・ 国王は病気に加った。  
ブレモンの観点では、語りととは、まさしくこのような三つ組の構造化に他ならない。しかし、語りとなる可能性が、単に三つ組化できるかどうかの問題では済まないことは明らかである。細分化すればするほど、われわれは語りから遠ざかっていく。それが語りとなるためには、いかなる三つ組においても、段落相互の必要最小限の相違、距離が必要となってくる。<sup>7)</sup>  
たしかにテキストを物語内容のレベルで三つ組化していくなら、スコールズのいうようにいく通りにも分類することができるが、物語言説のレベルに限定してそこから「三つ組」をとりだすなら、その記述は可能であるし、有効性もある。ここでは右の考え方を利用して川端康成の「化粧」の構造分析を試みたい。

「化粧」の冒頭には白菊がさんさんと輝く場面がある。そこでの「私」は徹夜の疲れがその香りによって癒される。しかし花は咲き誇るときが過ぎれば、やがて自然の摂理で枯れていく。開花の頂点はとうじに凋落のはじまりである。そのことが今度は色の濃い花である「紅薔薇や桔梗」の花の枯れる様子で示されている。ブレモンのいう「端と端」の連繫をふまえて図示すると図6のようになる。

「私」のその期待を裏切る方向で化粧を行う(図7)。

だが「化粧」はそこではおわっていない。「昨日のこと」として「一七八の少女」が厠で泣きつく場面が語られる。ここでは「若い女」の登場によって「私」の思念に与えられた「女に対する悪意」を少女がぬぐい去ってくれようとするが、少女が鏡をとりだし「笑み」をうかべることで、「私」は「水を浴びたやうな驚き」を抱く。悪化する予感が少女の涙でプラスの方向に向かうが、再び少女の笑みによってマイナスの方向へ向かう。その変化の過程を図示すると図8となる。

さてこのような図式化に、いかなる有用性があるのか。文学解釈を行う場合は、分岐点においてどのような力が見えたらき、その方向が変わっていくのかを見極めることが必要であろう。疲労で気絶したメロス(太宰治「走れメロス」)が目覚めるのは、自然の恵みとしての露が頬におちたからだし、『金閣寺』の主人公が金閣に対して行為に踏み切るのは、ある呪文が助力をなしたからである。物語の流れを、その起点に留意しながら捉えなおしてみするために、この図式は重要な手がかりを与えてくれる。あらかじめ解釈が進んでいたなら、その解釈に沿ったかたちで構造図が描かれることが多いだろうが、解釈が深まっていない段階なら構造分析が解釈への気づきを与えてくれる。図5～8の「化粧」に関する物

図8. 「化粧」のサイクル（少女の場面）

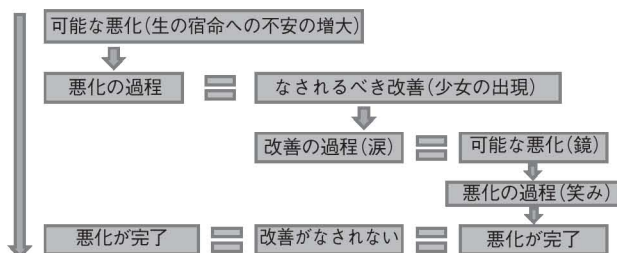
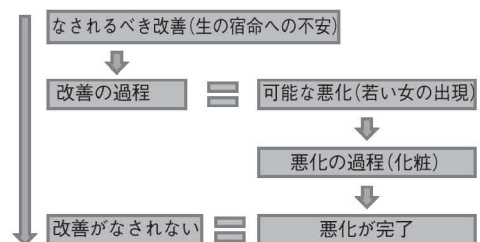


図7. 「化粧」のサイクル（若い女の場面）



改善の過程において、「若い女」が厠の鏡に向かって化粧を始めることで、改善の極に達するのがさまたげられる。



語の構造分析を一枚の図にまとめることもできる。この一覧表により、物語の筋立てを一望することができる。

### 三、ロラン・バルトの構造分析

ロラン・バルトが「物語の構造分析序説」において行ったシークエンス分析の実践をもとに、「化粧」の構造分析を行ってみたい。バルトは、もつとも小さな母型からもつとも大きな機能体にいたるまで、物語を構造化し、シークエンスの大きなピラミッドの図式化を押し進めていく。

物語の構造分析を行うには、まず、いくつかの記述の審級（レベル）を区別し、これらの審級を階層的（組み込み的）展望のうちに位置づけなければならぬ。各レベルは固有の単位と固有の相関関係をもつが、どのレベルも単独では意味を生み出せない。バルトが提案する三つの記述レベルは、『機能』のレベル、『行為』のレベル、『物語行為』のレベルである。この三つのレベルは、段階的な組み込みという方式によって相互に関連づけられ、最終的な意味生成の関係が検討される。バルトは、三つの記述レベルの「分布」と「組み込み」の関係から物語の構造分析を行う。

バルトは、まず物語を切りわけ、物語のディスカールの諸線分を限定していく。切りわけられた物語の最小単位が、『機能』のレベルを構成する。その最小単位が分布関係の基本を形作る。機能体は、内容の単位であり、あるときは文よりも上位の単位によって表され、あるときは下位の単位によって表される。そう述べたうえで、バルトは『機能』のレベルを二分する。一つは『機能体』（相関項として同じレベルの単位をもつ分布的なもの）、もう一つは『指標』（他の単位を飽和させるためには、別のレベルに移らなければならない組み込み的なもの）である。

さらに『機能体』と『指標』をバルトはそれぞれ下位分類する。『機能体』の下位分類としては『枢軸機能体』（物語の真の蝶番となるもの）と『触媒』（蝶番＝機能体をへだてている物語空間を、埋めるだけのもの）がある。『指標』の下位分類としては『指標』（固有の意味での『指標』であり暗黙の記号内容をもつもの）と『情報提供者』（同定し、時間的空間的に位置づける役目をはたすもの）がある。そのうえでバルトは次のように述べる。

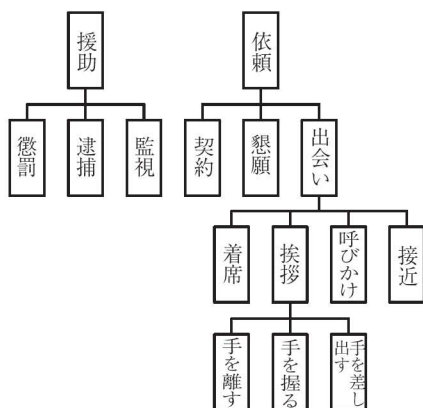
仮に指標、情報提供者、触媒を取り除いても、なお物語のなかには、非常に多くの枢軸機能体が残る。（中略）枢軸機能体は、その『重要性』によつ

てではなく、その相互関係の（二重含意的な）性質によってのみ限定される（中略）。物語の機能的包括は、中継点の組織化を必要とするが、その基底単位となるのは機能体の小さな集まり以外にありえない。ここではこの集まりを（C1プレモンにならって）、シークエンスと呼ぶことにする。

シークエンスとは、互いに連帯性（関係性）によって結ばれた核の論理的連続である。（中略）シークエンスは、常に命名することができる。（中略）シークエンスはまた最大限に根拠を持つ。つまり、いくつかの機能体をまとめ、一個の名称のもとに包摂するシークエンスそのものが、新たな単位を構成し、他のもつと大きなシークエンスの単なる一つの項として機能しうるのである。

バルトは右の説明をしたうえで、ジェームズ・ボンドが登場する『ゴールド・フィンガー』のシークエンス分析を行っている。バルトが問題にするのは、『機能』のレベル内における『枢軸機能体』相互の論理的关系性によって構成される階層組織である。

物語が順に展開されて、デュ・ボンの煙草からゴールド・フィンガー対ボンドの戦いに達することができたとき、はじめて機能分析は終了する。機能体のピラミッドは、このとき、つぎのレベル（『行為』のそれ）に達する。それゆえ、シークエンス内の統辞法と同時に、シークエンス相互の（代理関係の）統辞法が存在するのである。こうして、『ゴールドフィンガー』の最初の挿話は、つぎのような（図系的）様相をおびる<sup>10</sup>。



バルトの主張は、ブレモンの「三つ組」の考え方と似るが、必ずしも三つで一つの組み合わせを考えるものではない。枢軸機能体によって構成されるシークエンスはもう少し柔軟な構造である。またブレモンがいう「組み込み」の理論も、バルトの場合は機能相互の論理的連続性を重視する。

ところで、バルトはくみ上げたピラミッドを最終的につなぐのは、登場人物が示す行為項であり、その行為項に物語としての役割を与えるのは、物語をいかに語るかという物語行為であると述べる。機能のレベルは行為項のレベルに組み込まれ、行為項のレベルは物語行為のレベルに組み込まれていく。しかし、この「物語の構造分析序説」では行為項分析や物語行為は分析の対象としてルール化されてはいない。バルトは、シークエンスのありかたを述べ、それが意図的な「ゆがみ」や「拡大」によって文学の意味作用に影響を及ぼしていくことを述べるにとどめる。行為項分析が実際にテキストに適用されるのは、「天使との格闘」においてである。

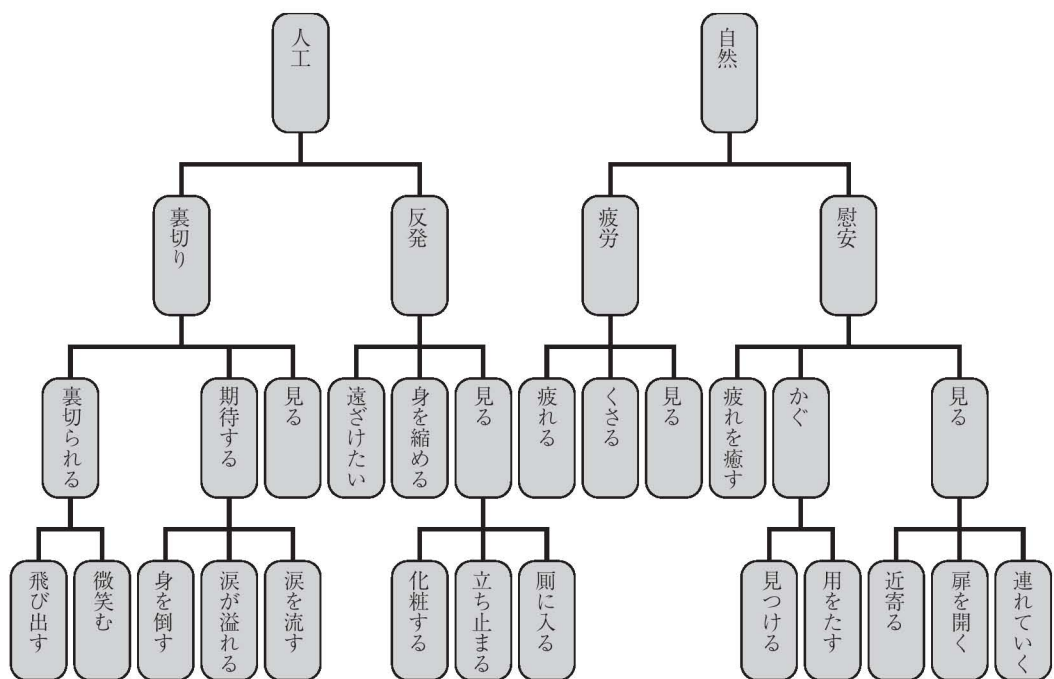
そこで本節では、バルトが提起したシークエンス分析の方法を中心に「化粧」の構造分析を行ってみたい。バルトが言うように、機能体のピラミッドが行為項によって組み込まれていくものなら、機能体の連続性によって組織されるシークエンスはある行為項を主体として構成されることになる。「化粧」のシークエンス分析にあたっては「私」を主にして考えてみたい。枢軸機能体の関係性に留意しつつシークエンス分析をしたものが図9である。

ではシークエンス分析を行う過程で、もしくは分析後にあらわれたピラミッド図を通して理解されることは何だろう。植物を例にした自然のコード（生と死の流れ）とその自然のコードを侵犯する若い女のコードを「私」が見るという「化粧」のシークエンスは、そのシークエンスの細部に目をやると、生から死へと向かう自然のサイクルのあとに、カナリアがじっと止まっている場面があり、それによって生↓死↓癒し、となっていることに気づかされる。

「化粧」では、まず植物を例にした自然のコード（生と死の流れ）の提示があり、そのコードを人間がいかに侵犯するかが語られる。カナリアは自然のサイクルをいやす象徴的存在となるが、物語全体をとおして人間の裏切りをいやすはずの少女は、カナリアとおなじ形象を与えられながら、突然変貌するのである。

こうしたピラミッドは解釈の結果を図に反映させたものと考えられないこともない。だが階層関係をはっきりさせることで物語の全体像が明確に見えてくるし、このような手順は教育現場で活かされることが期待される。

図9



#### 四、構造分析からテキスト分析へ

バルトは右の物語の構造分析を行う一方で、はやくも次の試みを行っている。それが「天使との格闘」である。ここでバルトは構造分析によって物語の文法を定式化しようとするのではなく、構造分析を利用してテキスト分析に



向かおうとしている。体系化の精度をあげる方向ではなく、構造分析の各観点を柔軟に活用して解釈学に道を開いていく。文学研究者や文学教育者にとって、ここで展開されるバルトの方法が有効である。

バルトは次のように述べている。

テキスト分析にとって、テキストはある開かれた網目としてとらえられる。その網目とは、構造化され閉止を知らない言語活動そのものの無限の広がりにはかならない。テキスト分析はテキストがどこからやってくるか（歴史的批評）、またどのように構成されているか（構造分析）を言うのではなく、テキストがどのように解体され、爆発し、散布されるか、つまりテキストがコード化されたどのような道をたどって立ち去るか、を言おうとつとめるのである<sup>12</sup>。

バルトはまずシークエンス分析を行う。しかしもはやここでは正確にピラミッドを作成することに主眼は置かれていない。バルトは例文（『創世記』三二章二三―三三節）を、最初に三つの大きなシークエンスに分ける。それが「渡河」「格闘」「命名」のシークエンスである。「渡河」のシークエンスは「起きる→集める→渡る」「集める→渡らせる→一人だけ残る」と図示されるような冗長な文章構成となっている。この二つのサブシークエンスの冗長性は、読み取り可能性の摩擦や軋みをうみだしていると言う。ここでバルトは「真の解釈」を求めはしない。むしろ二つの異なった読み取り可能性の圧力を最後まで追っていくのである。続く「格闘」と「命名」も、この二重のシークエンスにつながると、二つの解釈のどちらにおいても、二重の読み取りが最後まで一貫して続けられると言う。

ところで「格闘」の挿話においては、読み取り可能性の障害についても指摘している。この障害は、格闘する二人の当事者を指す代名詞が互いに交換できるものであることから生じている。そう指摘したうえで、この曖昧語法は、表現上の単なる障害ではなく、神話の闘いの定型から逸脱している意味で格闘の逆説的な構造と結びついているとバルトは述べる。

以上がシークエンス分析をふまえたテキスト分析の実例である。つまりバルトはテキストの意味生成を、構造の重なりや冗長性、曖昧性をもとに考えようとしている。シークエンス分析によってピラミッド図を美しく組み上げようとすることから、シークエンス分析の過程ではみ出したり、重なったり、よんでいるいたりする部分に着目することで、そこからテキスト解釈へ向かおうとして

いるのである。むしろ物語構造の裂け目を見いだすための有効な装置として、シークエンス分析はあるわけである。

バルトはこの講演において、シークエンス分析に続けて次の分析を行っている。一つは行為項分析であり、一つは機能分析である。行為項分析から見ても、バルトが参照したグレマスの行為項では、ある物語の登場人物、行為者を六つの行為項という形式クラスに分ける（行為項は何人も登場人物を一つにまとめることができる。また一人の登場人物がいくつもの行為項を兼ねることもできる。行為項は無生物の実体によって表されることもある）。『創世記』の例文に適用すると、行為項は以下のようになるとバルトは述べる。「主体」はヤコブ。「対象」は渡河。「送り手」は神。「受け手」はヤコブ。「反対者」は神。「補助者」はヤコブ。主体が受け手と一つになることはよくあるが、「主体」が自分自身の「補助者」になることは稀で、「送り手」が「反対者」となることはもっと稀だと述べている。そのように述べたうえで、この挿話の行為項の定式が構造的にきわめて大胆で、この大胆さが「神」の敗北という形をとったスキャンダルと見事に対応していると述べるのである。

続けて機能分析を見ておこう。プロップによれば、機能とは安定した要素であって、その数は限られ、その連鎖は常に同一であるという。スコルズの言葉を借りると次のようになる<sup>13</sup>。

機能を「筋の展開過程の中での意義という観点から規定された、登場人物の行為」としたプロップは、四つの法則を帰納的に編み出した。**1**、登場人物の機能は誰によつてどのように実現されるかとは無関係に、物語の中で一定・不変の要素をなしている。**2**、魔法昔話に認められる機能の数は限られている（三十一）。**3**、機能の継起順序は常に同一である。**4**、あらゆる魔法昔話は構図に関するかぎり単一の類型に属する。

この「創世記」の例文もまたプロップが示した機能の図式の一部を尊重しているとバルトは述べる。この挿話にも、敵意をもつ精によって守られた浅瀬の困難な通過という、民話のまぎれもない定型が読み取れると。

バルトはこうしてシークエンス分析、行為項分析、機能分析を行いながら、テキストの読み取りを行っていく。バルトのここでの仕事は「テキストの読み取りを、テキストの真実ではなく、テキストの散布を追求していく」こと、「テキスト」を一つの記号内容（歴史的、経済的、民間伝承的、ケリグマ的）に還元せず、テキストの表意作用を開かれた状態に保つようにすること」

にあった。

バルトの方法を「化粧」に適用すると次のようになる。バルトが指摘した構造上の冗長性や曖昧性は「化粧」に見られるか。図9を参照し、異質なシークエンスがあるか探ってみよう。

テクスト冒頭部において「私」は妻とその妹を伴い、廁の扉を開く。すると白菊の香りが花を衝く。手洗場の窓に顔を寄せ、妻はその白菊を折り取りそうにする。そのとき「私は電灯をつけ」る。その結果、「花環に巻いた銀紙がさんらんと照らし出され」る。この構造は、もう一度繰り返される。すなわち仕事をする時は度々廁へ立つ「私」は、「その夜幾度となく菊の匂ひを嗅いで」、徹夜の疲れをいやすのであるが、「やがて朝の光に、白菊はいよいよ白く、銀紙は輝きはじめた」と語られる。電灯をつけることで銀紙が輝き、朝の光によって白菊が輝きを増す。そして電燈や太陽の光によって見出された慰安は、カナリアの形象によって決定的となる。

この繰り返しは、枯れてゆく「紅薔薇」や「桔梗」を「五六日の間つぶさに見た」という行為および「斎場の廁の窓に、私はまた人間も見なければならぬ」の行為を通して、反対の意味において、もう一度登場する。「私」が繰り返し見つける「銀紙」「白菊」「カナリア」は、反対の形象として、「紅薔薇」「桔梗」が枯れていくさま、「若い女」が化粧をするさま、「十七八の少女」が「小さい鏡」に向かって「にいつと笑つて」出ていくさまによって繰り返されるのである。「化粧」の物語においては、電灯により、また朝の光により見いだされたものが「私」の疲れをいやすが、その繰り返しがこだまのように、反対の意味の繰り返しを呼び出していく。

次に「化粧」の行為項分析を行ってみよう。「主人公」「私」「獲物」「清純」「送り手」「自然」「受け手」「私」「協力者」「少女」「反対者」「若い女・少女」となる。「化粧」の場合、自然の摂理の流れに棹さすのは、生の永続化を願って化粧をする「若い女」である。少女は、聖女から魔女へと変貌する。行為項分析でいうと、少女は「私」の協力者から敵対者へ移行したことになる。このようなタイプの物語は、同一人物が態度を一変させるサスペンス・ドラマを想起させる。

「化粧」の機能分析は可能であろうか。「化粧」の機能を、プロップが整理したロシア民話（魔法昔話）の機能の法則化（三一の機能）<sup>14</sup>にならってとり出すと次のようになる。なお数字はプロップが三一の機能それぞれに振った番号である。プロップの機能内容の説明に続けて、その機能に対応する「化粧」の内容を丸括弧内に記した。

8 家族の成員のひとりに、何か欠けている。そのものが何かを手に入れたいと思う。（「私」に疲れがあり、癒しを求めている。）

9 被害なり欠けなりが知らされ、主人公に頼むなり命令するなりして主人公を派遣したり出立を許したりする。（枯れゆく花をみて、さらなる癒しを求める。）

11 主人公は、探し求める対象のある場所へ、連れて行かれる・送りとどけられる・案内される。（斎場の廁の窓を見る。）

16 主人公と敵対者が、直接闘う。（若い女の化粧を見る。）

24 ニセ主人公が不当な要求をする。（一七八の少女の涙と笑みを見る。）

25 主人公に難題が課せられる。（私には謎の笑ひである。）

しかしこうした分析は、おそらく「化粧」読解にとって生産的な方法とはなまるまい。「化粧」を「私」の認識のドラマと捉え、「私」が書斎から「廁」へ旅にでて、そこで「若い女」という敵と出会い、「一七八の少女」というにせ主人公と出会い、難題を与えられる物語と捉えるのである。「私」は敵に勝つことができない。そこで「私」は、「私には謎の笑ひである。」と言う技を繰り出し抵抗する。近代の小説がどこかで昔話の構造を引き受けているとしてもそれは物語である以上、当然のことと言える。バルトは「天使との格闘」において聖書の一節にプロップのいう昔話と同じ機能を見いだしたが、「化粧」における機能分析が解釈に活かされるとすれば、プロップのいう三一の機能を下敷きとし、その機能体系からいかに離れているかを探ることであろう。「化粧」の「私」は、結婚し即位したりはしないのである。

## 五、おわりに

われわれは読書の過程で、驚くほど美しい構成をもつ作品に遭遇したりする。たとえば太宰治の「富嶽百景」や宮沢賢治の「雁の童子」などがそうである。してみれば「構成」とは具体的な作品のなかに関係性を見いだす営みだといつてよい。それに対して「構造」は作品のそとに普遍的な法則性を用意したうえで、その法則性を具体的な作品に当てはめ、その適用具合を見てみようとする営みである。

考えてみれば、われわれは物語を耳にした幼いときから、物語とは何か、物語の構造とは何かについて学び始め、物語というジャンルのコードを習得すること、新たな物語に接したときも、それを物語の枠組みのなかで消化・吸収



することができたのである。読書行為のなかで読み手がいだく期待も、感動や失望といった反応の由来もそのコードと深いかわりがある。

個々の文学テクストを読解し、そこにある種の法則性を見いだしたとき、われわれは文学に出会った思いをいだく。しかしながらテクストを精緻に読んでいく作業の中で、ともするとわれわれは木を見て森を見ない事態に立ちいたつてしまう。物語の構造分析を行う営みは、その森をもう一度見ようとする営みである。それはいつけん迂遠な行為のように思われるが、森のなかに木の姿を捉えなければ、木の個性はみえないのである。

物語の文法は、個々の作品を理解するためにある。構造分析の手法は、残念ながら今のところ完全なものではないし、これからも完全なものになることはないだろう。しかし完璧を求めなければ、森の姿はみえてくる。その森の片かげにさえ木は映るのである。

## 注

<sup>1</sup> 本稿は以下の小埜裕二の論考の続編である。

「川端康成「化粧」の表現機構」(『上越教育大学研究紀要』一九九七年三月)

「川端康成「化粧」の表現機構(2)」(『上越教育大学研究紀要』二〇〇五年七月)

「川端康成「化粧」の解釈学」(『上越教育大学研究紀要』二〇〇七年三月)

「川端康成「化粧」の文化研究」(『イミタチオ』二〇〇八年十二月)

<sup>2</sup> ジェラルド・ジュネットが『物語のデイスクール』において詳述したナラトロロジーの理論は、構造分析の最高の成果といえる。しかし本稿では、ジュネットの理論とは異なる観点から構造分析を考えていく。ジュネットのナラトロロジー理論については、注1の「川端康成「化粧」の表現機構(2)」において言及している。

<sup>3</sup> 土田知則・青柳悦子・伊藤直哉『ワードマップ現代文学理論―テクスト・読み・世界―』(一九九六年一月 新曜社)「物語の潜在構造」の項目(青柳悦子)でも同様のことが述べられている。

<sup>4</sup> ロバート・スコルズ『スコルズの文学講義―テクストの構造分析にむけて―』(高井宏子・柳谷啓子・岩本弘道・具島 靖訳 岩波書店 一九九二年五月 Structuralism in a literature : An Introduction Yale University Press, 1974)

<sup>5</sup> 注4に同じ。一三七頁

<sup>6</sup> クロード・ブレモン『物語りのメッセージ』(坂上 脩訳 一九七五年一〇月

審美社) 所収

<sup>7</sup> 注4に同じ。一四九頁～一五一頁

<sup>8</sup> ロラン・バルト「物語の構造分析序説」(『物語の構造分析』所収 花輪 光訳 一九七九年一月 みすず書房 Communications, 8, novembre, 1966)

<sup>9</sup> 注8に同じ。二五頁～二八頁

<sup>10</sup> 注8に同じ。二八頁～二九頁

<sup>11</sup> ロラン・バルト「天使との格闘」(『物語の構造分析』所収 花輪 光訳 一九七九年一月 みすず書房 一九七一年二月のジュネーブ大学プロテスト神学部主催シンポジウム講演)

<sup>12</sup> 注11に同じ。五七頁

<sup>13</sup> 注4に同じ。引用文は一部まとめて記述した。

<sup>14</sup> ウラジミール・プロップ『昔話の形態学』(北岡誠司、福田美智代訳 一九八七年八月 書誌風の薔薇 第一部 Ⅲ章「登場人物の機能」)

# The Structure Analysis Research of Kawabata Yasunari “Kesyo”

Yuji ONO\*

## ABSTRACT

As for structure analysis the literary work, having some kind of meaning for interpretation activity? In this research, it examined concerning the method of making the structure of the literary work clear, and the method to interpretation on the basis of the result of structure analysis, on the basis of Claude Bremond and Roland Barthes method. And we analyzed s Kawabata Yasunari “Kesyo” concretely.

---

\* Humanities and Social Studies Education